

第2章 現代の子どもの特性～2014年と2021年の比較～

浜島幸司
(短期大学講師)

はじめに

学校現場で教員たちはどのような子どもたちが多くなっていると感じているのだろうか。本章では教員が考えている現代の子どもの特性を回答結果（Q1）から明らかにする。なお、2014年実施の小中学校教員調査でも同じ項目を用いている。2時点の回答結果を比較しながら、2021年の教員たちの子ども像をまとめる。

1 2021年調査の結果

Q1「現在教えている子どもについて、先生ご自身が次のように感じることはありますか」として11項目用意した（前回同様の10項目（A～J）に加え、「K 情報機器（パソコン、タブレット、スマホ等）に長けた子どもが多くなっている」を加えた）。回答総数763名のうち「無答・不明」以外を図から外した単純集計である（図2-1）。

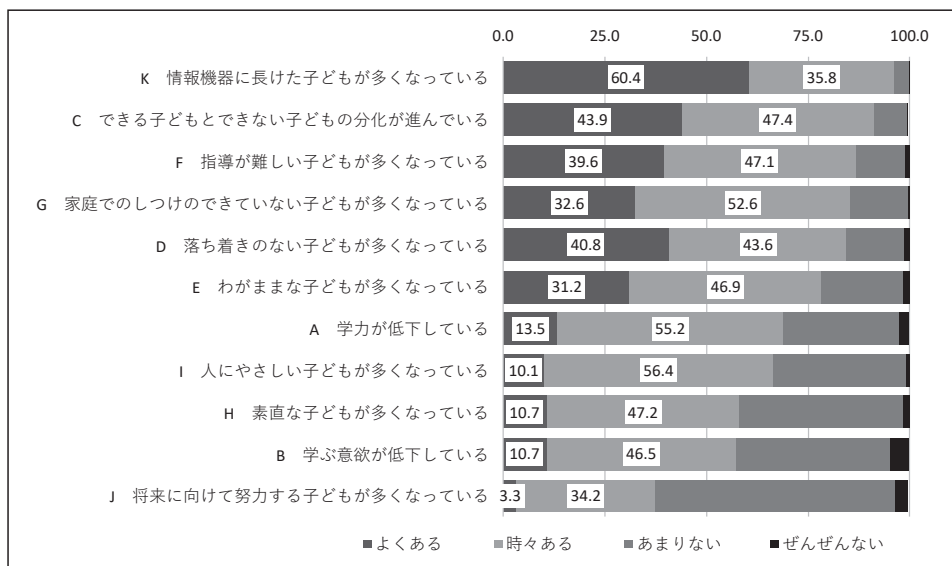


図2-1 現在教えている子どもについて感じること（11項目）

図2-1のように、「ある（よく+時々）」の回答割合が多い順にみていくと、「K 情報機器に長けた子どもが多くなっている」（96.2%）、「C できる子どもとできない子どもの分化が進んでいる」（91.3%）が9割を占めている。次いで、「F 指導が難しい子どもが多くなっている」（86.7%）、「G 家庭でのしつけのできていない子どもが多くなっている」（85.2%）、「D 落ち着きの

ない子どもが多くなっている」(84.4%)が8割を超えている。また、「E わがままな子どもが多くなっている」(78.1%)、「A 学力が低下している」(68.7%)、「B 学ぶ意欲が低下している」(57.2%)とネガティブ寄りの項目への賛同が多くなっている。片やポジティブ寄りの「I 人にやさしい子どもが多くなっている」(66.5%)、「H 素直な子どもが多くなっている」(57.9%)の項目へも半数以上の回答がみられた。今回、「J 将来に向けて努力する子どもが多くなっている」(37.5%)への賛同が最も少なくなっている。

このように前回同様、今回も教員の多くが最近の子どもについて現状を肯定できるような思いを抱いていないことがうかがえる。

2 2014年調査との比較

2014年は小中学校の教員に同様の項目を尋ねている。小学校の教員データ(519名)を取り出し、再集計した。2時点に違いがあるのかを確認してみよう(図2-2)。

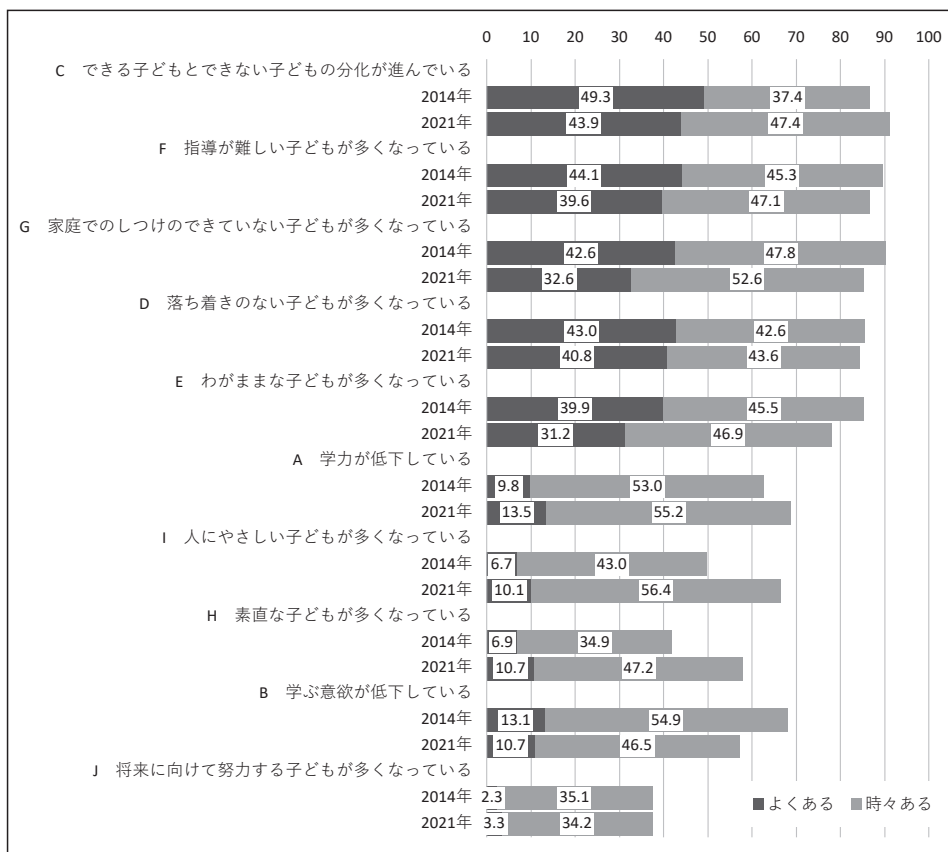


図2-2 2014年調査と2021年調査の比較(10項目)

図2-2のように、「ある(よく+時々)」の割合が2時点で変わらない、変わっている項目が散見される。2時点とも割合の高い「C できる子どもとできない子どもの分化が進んでいる」、「F 指導が難しい子どもが多くなっている」、「G 家庭でのしつけのできていない子どもが多くなっている」、「D 落ち着きのない子どもが多くなっている」は大きな差はない。一方で、「E わが

ままな子どもが多くなっている」(今回7.3ポイント減)、「A 学力が低下している」(同5.9ポイント増)、「I 人にやさしい子どもが多くなっている」(同16.8ポイント増)、「H 素直な子どもが多くなっている」(同16.1ポイント増)、「B 学ぶ意欲が低下している」(同10.8ポイント減)は差がみられる。

学力低下への危惧は増えているものの学ぶ意欲は低下しておらず、やさしい、素直な子どもといった評価が増えている。7年間での意識の違いが確認できる。

では、この違いは属性によるものなのか。代表的な性別および役職（管理職か否か）別に確認してみよう（表2-1）。なお、最初に断っておくが、2014年調査での回答サンプルに偏りがある。男性が多く、女性が少ない。また、管理職（校長・副校長・教頭）が多く、非管理職（主任といった役職者および役職なし）が少ない。

表2-1 性別および役職別2時点間の比較（10項目）

ある（よく+時々）% N	男		差	女		差	管理職 (校長・副校長・ 教頭)		差	非管理職 (左記以外)		差
	2014年	2021年		2014年	2021年		2014年	2021年		2014年	2021年	
	403	363		116	400		410	159		103	600	
C できる子どもとできない子どもの分化が進んでいる	87.5	91.2	3.7	86.1	91.5	5.4	87.5	89.2	1.7	86.4	92.3	5.9
F 指導が難しい子どもが多くなっている	89.6	85.9	-3.7	89.6	87.3	-2.3	91.2	92.5	1.3	83.3	85.0	1.7
G 家庭でのしつけのできていない子どもが多くなっている	90.0	86.3	-3.7	92.2	84.3	-7.9	91.9	89.9	-2.0	85.4	83.8	-1.6
D 落ち着きのない子どもが多くなっている	85.4	82.1	-3.3	86.2	86.6	0.4	87.1	88.1	1.0	80.6	83.5	2.9
E わがままな子どもが多くなっている	85.4	77.9	-7.5	85.3	78.3	-7.0	86.6	84.9	-1.7	80.6	76.3	-4.3
A 学力が低下している	62.3	64.8	2.5	66.4	72.3	5.9	62.3	69.6	7.3	66.7	69.1	2.4
I 人にやさしい子どもが多くなっている	51.6	64.2	12.6	44.3	68.6	24.3	50.1	63.5	13.4	48.0	67.6	19.6
H 素直な子どもが多くなっている	42.2	53.4	11.2	40.9	62.0	21.1	40.2	57.2	17.0	46.1	58.4	12.3
B 学ぶ意欲が低下している	68.2	60.3	-7.9	67.2	54.5	-12.7	68.5	62.0	-6.5	66.0	56.3	-9.7
J 将来に向けて努力する子どもが多くなっている	35.7	37.4	1.7	43.1	37.5	-5.6	37.3	38.6	1.3	35.9	37.3	1.4

差が絶対値5ポイント以上のセル（得点が高いほう）に網掛け

男性は「E わがままな子どもが多くなっている」(7.5ポイント)、「B 学ぶ意欲が低下している」(7.9ポイント)が減り、「I 人にやさしい子どもが多くなっている」(12.6ポイント)、「H 素直な子どもが多くなっている」(11.2ポイント)が増えた。女性は「G 家庭でのしつけのできていない子どもが多くなっている」(7.9ポイント)、「E わがままな子どもが多くなっている」(7.0ポイント)、「B 学ぶ意欲が低下している」(12.7ポイント)、「J 将来に向けて努力する子どもが多くなっている」(5.6ポイント)が減り、「C できる子どもとできない子どもの分化が進んでいる」(5.4ポイント)、「A 学力が低下している」(5.9ポイント)、「I 人にやさしい子どもが多くなっている」(24.3ポイント)、「H 素直な子どもが多くなっている」(21.1ポイント)が増えた。男性教員はポジティブな子ども評価になっているが、女性教員はポジティブだけでなく、ネガティブな子ども評価もしている。

管理職は「B 学ぶ意欲が低下している」(6.5ポイント)が減り、「A 学力が低下している」(7.3ポイント)、「I 人にやさしい子どもが多くなっている」(13.4ポイント)、「H 素直な子どもが多くなっている」(17.0ポイント)が増えた。非管理職は「B 学ぶ意欲が低下している」(9.7ポイント)が減り、「C できる子どもとできない子どもの分化が進んでいる」(5.9ポイント)、「I 人にやさしい子どもが多くなっている」(19.6ポイント)、「H 素直な子どもが多くなっている」(12.3ポイント)が増えた。管理職はポジティブな子ども評価になっている。

3 年齢別の分析：年代効果か、加齢効果か

2014年と2021年の違いを探るうえで重要な変数が「年齢」である。教員の回答が「年代」によるものなのか、「加齢」によるものなのか、「年齢」から推測が可能である。まずは「年代」による違いの有無を確認した(表2-2)。

表2-2 年齢(3区分)別2時点間の比較(10項目)

	39歳以下		差	40-50歳		差	51歳以上		差	
	-39歳			40-49歳			50歳-			
	ある(よく+時々)%	2014年		2021年	2014年		2021年	2014年		2021年
	N	29	258	49	175	431	330			
C	できる子どもとできない子どもの分化が進んでいる	86.2	91.4	5.2	86.4	93.1	6.7	87.4	91.2	3.8
F	指導が難しい子どもが多くなっている	75.9	80.2	4.3	86.2	86.9	0.7	91.0	91.5	0.5
G	家庭でのしつけのできていない子どもが多くなっている	86.2	81.0	-5.2	83.1	86.3	3.2	91.9	87.9	-4.0
D	落ち着きのない子どもが多くなっている	69.0	77.9	8.9	88.1	87.4	-0.7	86.3	87.9	1.6
E	わがままな子どもが多くなっている	75.9	69.4	-6.5	81.4	79.4	-2.0	86.5	84.2	-2.3
A	学力が低下している	50.0	64.6	14.6	61.0	69.2	8.2	64.3	72.3	8.0
I	人にやさしい子どもが多くなっている	58.6	70.2	11.6	47.5	67.5	20.0	49.8	63.2	13.4
H	素直な子どもが多くなっている	62.1	60.1	-2.0	40.7	60.0	19.3	40.7	55.2	14.5
B	学ぶ意欲が低下している	44.8	56.2	11.4	62.7	54.9	-7.8	70.3	59.6	-10.7
J	将来に向けて努力する子どもが多くなっている	20.7	36.8	16.1	40.7	34.2	-6.5	38.1	40.1	2.0

表注：2時点の調査で年齢区分に違いがあり、厳密な比較はできない

表2-2のように、30代は「G 家庭でのしつけのできていない子どもが多くなっている」(5.2ポイント)、「E わがままな子どもが多くなっている」(6.5ポイント)が減り、「C できる子どもとできない子どもの分化が進んでいる」(5.2ポイント)、「D 落ち着きのない子どもが多くなっている」(8.9ポイント)、「A 学力が低下している」(14.6ポイント)、「I 人にやさしい子どもが多くなっている」(11.6ポイント)、「B 学ぶ意欲が低下している」(11.4ポイント)、「J 将来に向けて努力する子どもが多くなっている」(16.1ポイント)が増えた。40代は「B 学ぶ意欲が低下している」(7.8ポイント)、「J 将来に向けて努力する子どもが多くなっている」(6.5ポイント)が減り、「C できる子どもとできない子どもの分化が進んでいる」(6.7ポイント)、「A 学力が低下している」(8.2ポイント)、「I 人にやさしい子どもが多くなっている」(20.0ポイント)、「H 素直な子どもが多くなっている」(19.3ポイント)が増えた。50代は「B 学ぶ意欲が低下している」(10.7ポイント)が減り、「A 学力が低下している」(8.0ポイント)、「I 人にや

さしい子どもが多くなっている」(13.4ポイント)、「H 素直な子どもが多くなっている」(14.5ポイント)が増えた。

2014年調査の30代(39歳以下)、40代(40-50歳)は回答数が少ないことを意識しつつも、2021年においては3つの年代ともに「C できる子どもとできない子どもの分化が進んでいる」、「A 学力が低下している」、「I 人にやさしい子どもが多くなっている」が増えたといつてよい。同じ年代で比較しても2021年の子ども像に違いがあることが確認できる。

しかし、これは各時点がもつ「年代」の効果であるといつてよいのか。そこで2014年の回答世代が7年後(歳を取って)も回答したと仮定したとして表2-3のように加工してみた。

表2-3 回答者の加齢(2014年→2021年)を想定しての比較(10項目)

	ある(よく+時々)%		差	2014年		差
	2014年	2021年		2014年	2021年	
N	39歳以下	40-49歳		40-50歳	50歳-	
C できる子どもとできない子どもの分化が進んでいる	29	175	6.9	49	330	4.8
F 指導が難しい子どもが多くなっている	86.2	93.1	11.0	86.2	91.2	5.3
G 家庭でのしつけのできていない子どもが多くなっている	75.9	86.9	0.1	83.1	87.9	4.8
D 落ち着きのない子どもが多くなっている	86.2	86.3	18.4	88.1	87.9	-0.2
E わがままな子どもが多くなっている	69.0	87.4	3.5	81.4	84.2	2.8
A 学力が低下している	75.9	79.4	19.2	61.0	72.3	11.3
I 人にやさしい子どもが多くなっている	50.0	69.2	8.9	47.5	63.2	15.7
H 素直な子どもが多くなっている	58.6	67.5	-2.1	40.7	55.2	14.5
B 学ぶ意欲が低下している	62.1	60.0	10.1	62.7	59.6	-3.1
J 将来に向けて努力する子どもが多くなっている	44.8	54.9	13.5	40.7	40.1	-0.6
	20.7	34.2				

表2-3のように、2014年に30代だった教員が2021年に40代になったとした場合、「C できる子どもとできない子どもの分化が進んでいる」(6.9ポイント)、「F 指導が難しい子どもが多くなっている」(11.0ポイント)、「D 落ち着きのない子どもが多くなっている」(18.4ポイント)、「A 学力が低下している」(19.2ポイント)、「I 人にやさしい子どもが多くなっている」(8.9ポイント)、「B 学ぶ意欲が低下している」(10.1ポイント)、「J 将来に向けて努力する子どもが多くなっている」(13.5ポイント)が増えた。30代が歳を重ねるとネガティブおよびポジティブの両側面において子ども像が変化することが読み取れる。

2014年に40代だった教員が2021年に50代になったとした場合、「F 指導が難しい子どもが多くなっている」(5.3ポイント)、「A 学力が低下している」(11.3ポイント)、「I 人にやさしい子どもが多くなっている」(15.7ポイント)、「H 素直な子どもが多くなっている」(14.5ポイント)が増えた。40代が歳を重ねるとネガティブよりもポジティブな側面において子ども像が変化することが読み取れる。

4 3つの現代の子どもの特性(「わがまま」「素直・いい子」「学びの問題」)

2014年調査の報告書(第2章参照)では、この10項目をもとに教員たちがどのような特性を「まとめ」として潜在的に考えているのか、多変量解析の1つである因子分析を用いて明らかにした。分析の詳細は省くが、10項目を因子分析(主因子法、バリマックス回転)した結果、3つの因子が抽出された。第1因子(「E わがままな子どもが多くなっている」、「F 指導が難しい

子どもが多くなっている」、「D 落ち着きのない子どもが多くなっている」、「G 家庭でのしつけのできていない子どもが多くなっている」の負荷量が高い)は「わがまま」と命名、第2因子(「I 人にやさしい子どもが多くなっている」、「H 素直な子どもが多くなっている」、「J 将来に向けて努力する子どもが多くなっている」の負荷量が高い)は「素直・いい子」と命名、第3因子(「A 学力が低下している」、「B 学ぶ意欲が低下している」、「C できる子どもとできない子どもの分化が進んでいる」の負荷量が高い)は「学びの問題」と命名した。

2021年データでも因子分析を実施し、同じく3因子が抽出された。前回同様、各項目での回答得点を利用し、2時点の比較をおこなうこととする。

第1因子(「わがまま」)は、前述の4項目の因子負荷量が高い。これらの回答(「よくある」=4点、「時々ある」=3点、「あまりない」=2点、「ぜんぜんない」=1点)を足し上げた。足し上げることが妥当であるかどうかについてクロンバックの α 係数を求めたところ0.719(2014年の小学校教員のみのデータでは0.872)であった。一貫した尺度として妥当とみなされる0.7を超えている。得点が高いほど、「わがまま」を感じているということになる。第2因子(「素直・いい子」)は、前述の3項目の因子負荷量が高い。これらの回答を足し上げ、クロンバックの α 係数を求めたところ0.849(同0.783)であった。得点が高いほど、「素直・いい子」を感じているということになる。第3因子(「学びの問題」)は、前述の3項目の因子負荷量が高い。これらの回答を足し上げ、クロンバックの α 係数を求めたところ0.718(同0.737)であった。得点が高いほど、「学びの問題」を感じているということになる。

2時点の3つの因子(合成得点)の平均得点を比較⁽¹⁾した(表2-4)。

表2-4 属性別「わがまま」「素直・いい子」「学びの問題」の平均得点(2時点比較)

		わがまま		差	素直・いい子		差	学びの問題		差
		2014年	2021年		2014年	2021年		2014年	2021年	
全体		7.42	7.81	-.43	8.84	8.78	.06	8.84	8.78	.06
		N	517		516	758		513	756	
性別	男	7.41	7.72	-.49	7.41	7.72	.31	8.85	8.78	-.07
		N	402		401	361		398	359	
	女	7.44	7.90	-.46	7.44	7.90	.46	8.79	8.79	.00
		N	115		115	397		115	397	
年齢	39歳以下	7.41	7.92	-.51	7.41	7.92	.51	8.25	8.71	-.46
		N	29		29	258		28	256	
	40-50歳 (2021年は40-49歳)	7.47	7.86	-.39	7.47	7.86	.39	8.78	8.86	-.08
	N	58		59	174		59	175		
	51歳以上 (2021年は50歳以上)	7.41	7.71	-.30	7.41	7.71	.30	8.89	8.80	-.09
		N	430		428	326		426	325	
加齢	39歳以下→40-49歳	7.41	7.86	-.45	7.41	7.86	.45	8.25	8.86	-.61
		N	29		29	174		28	175	
	40-50歳→50歳以上	7.47	7.71	-.24	7.47	7.71	.24	8.78	8.80	-.02
		N	58		59	326		59	325	
担任	している	7.27	7.89	-.62	7.27	7.89	.62	8.63	8.80	-.17
		N	49		48	437		49	437	
	していない	7.43	7.64	-.21	7.43	7.64	.21	8.86	8.79	-.07
	N	467		467	233		463	235		
	その他 (2014年項目なし)	7.94	7.94		7.94	7.94		8.70	8.70	
		N	84		84	84		81	81	
役職	管理職 (校長・副校長・教頭)	7.41	7.67	-.26	7.41	7.67	.26	8.86	8.80	-.06
		N	409		409	158		405	156	
	非管理職 (上記以外)	7.39	7.86	-.47	7.39	7.86	.47	8.78	8.79	-.01
		N	102		102	596		102	596	

差が絶対値0.5ポイント以上のセル(得点が高いほう)に網掛け

2021年調査全体の「わがまま」の平均得点は12.73で、2014年調査の13.16と比較して減少した。なお、「わがまま」の最小得点は4、最大得点は16で、中間得点が10なので2021年においても多くの教員が「わがまま」と認識している。

「素直・いい子」の平均得点は7.81で、こちらは2014年調査の結果（7.42）より増加した。なお、「素直・いい子」の最小得点は3、最大得点は12で、中間得点が7.5なので、「素直・いい子」との認識がやや高い。

「学びの問題」の平均得点は8.78で、2014年調査の結果（8.84）とわずかな差異であった。なお、「学びの問題」の最小得点は3、最大得点は12で、中間得点が7.5なので、多くの教員が「学びの問題」があると認識している。

表2-4のように、2時点の比較の結果、平均得点の差が0.5以上あった属性を確認しておこう。「わがまま」では、「(2014年) 39歳以下→(2021年) 40-49歳」の得点が増えた。「素直・いい子」では、「39歳以下」の得点が増えた。また、「担任をしている」教員の得点が増えた。「学びの問題」では、「(2014年) 39歳以下→(2021年) 40-49歳」の得点が増えた。

まとめると、全体の「わがまま」が減り、「素直・いい子」が増え、「学びの問題」が変わらないという傾向が強く、属性別の特徴はみられない。特記するとすれば、「加齢（現場経験に基づくものなのか、教員の心境の変化によるものなのか）効果である。「(2014年) 39歳以下→(2021年) 40-49歳」において、「わがまま」と「学びの問題」が大きく増えている（数値は0.5を下回っているが「素直・いい子」も増えている）。継続（パネル）調査ではないので推測の域を出ないものの、2021年の40代教員（2014年では30代中盤から後半）はこの7年の間、子どもたちに接する中で従来の子ども像とは違う印象を得る経験をしたのではないか。

さて、2021年調査では「年齢」および「担任の学年」について、まとまった回答数を確保している（「61歳以上」は26名と少ないが）。属性別に平均得点を図示してみた（図2-3）。

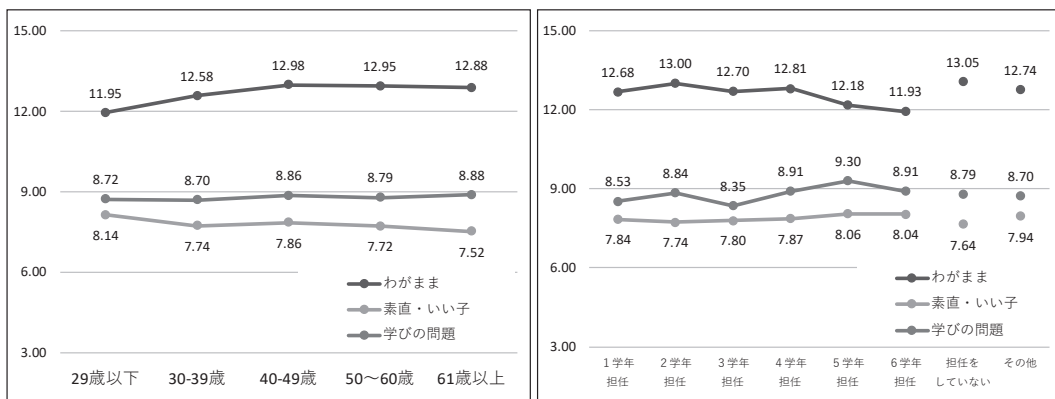


図2-3 「わがまま」「素直・いい子」「学びの問題」の平均得点の分布（2021年調査）

年齢別（左）

担任別（右）

「年齢」では、高齢になるほど「わがまま」が増え、「素直・いい子」が減っている。「学びの問題」は年齢による差異はみられない。「担任の学年」では、高学年になるにつれて「わがまま」が減り、「素直・いい子」が微増する。「学びの問題」は学年差が大きい。「担任をしていない」に「わがまま」の得点が高いという特徴もみられる。

まとめ

本章では教員たちが感じる現代の子どもの特性とはどういうものなのか今回の調査データと2014年の小学校教員のデータを比較してみた。分析から得られた知見は、以下のとおりである。

- ① 教員たちの多くは、2014年から7年経った段階でも子どもたちが肯定できない方向に向かっていると感じている。一方で、肯定できる項目への評価も増加している。
- ② 今回のデータでも、比較可能な10項目で因子分析をしたところ、「わがまま」、「素直・いい子」、「学びの問題」と3つの側面から子どもたちの特性を捉えており、2014年と認識枠組みは変わっていない。
- ③ 2014年と比べて、「わがまま」は減少、「素直・いい子」は増加、「学びの問題」は変化なしであった。管理職および40歳以上に「素直・いい子」、「学びの問題」の得点が高くなっている。40代に注目すると、30代に比べて評価が大きく変わる。これは時代による影響ではなく、加齢（自身の現場経験や心境の変化）によるものと推察できる。

2014年調査は管理職および男性に偏りのある回答であった。今回は役職のない教員、若手、女性の回答も多く、全体の比較には注意は必要である。懸念を意識しつつ、属性を揃えうえて分析したところ、総じて2021年調査では、ポジティブな子ども像への評価を確認することができた。もちろん、だからといって2014年調査で明らかになったネガティブな子ども像が弱まったわけでもない。

ここから導かれることは、肯定・否定が混在した子どもたちの振る舞いを教員たちが何らかの評価をして、現場に臨んでいるということである。2020年より拡大したコロナ禍での学校現場もまた従来にない混乱があることは容易に想像がつく。本知見が子どもたちの現状と教員たちの認識を共有する手掛かりになることを願う。

〈注〉

- (1) 3つの変数間の相関係数（ピアソン）は次のとおりである（表2-5）。2時点ともに「わがまま」と「学びの問題」に正の相関がみられる。「素直・いい子」と「わがまま」および「学びの問題」に負の相関がみられる。

表2-5 「わがまま」「素直・いい子」「学びの問題」の相関係数

	わがまま	素直・いい子	学びの問題
わがまま	—	-0.284 ** (514)	0.598 ** (511)
素直・いい子	-0.294 ** (758)	—	-0.283 ** (510)
学びの問題	0.535 ** (756)	-0.240 ** (751)	—

上段：2014年 ** p<0.01

下段：2021年 ()は分析度数 (N)